

今は昔、一条摂政とは東三条殿の兄におはします。御かたちより初め、心用ひなどめでたく、才、有様、まことしくおはしまし、また、色めかしく、女をも多く御覧じ興ぜさせ給ひけるが、少し軽々に覚えさせ給ひければ、御名を隠させ給ひて、大蔵（おほくら）の丞豊蔭（じょうとよかげ）と名のりて、上ならぬ女のがりは御文も遣はしける。一懸想せさせ給ひ、逢はせ給ひもしけるに、皆人、さ心得て知り参らせたり。

やんごとなくよき人の姫君のもとへおはしまし初めにけり。乳母、母などを語らひて、父には知らせさせ給はぬ程に、二聞きつけて、いみじく腹立ちて、母をせため、爪弾をして、いたくのたまひければ、「さる事なし」とあらがひて、「まだしき由の文書きて給べ」と母君のわび三申したりければ、

人知れず身はいそげども年を経てなど越えがたき逢坂の関

とて遣はしたりければ、父に見すれば、「さては四空事なりけり」と思ひて、返し、父のしける。

あづま路に行きかふ人にあらぬ身は五いつかは越えん逢坂の関

と詠みけるを見て、ほほゑまれけんかすと、御集にあり。をかしく。

一 「せさず」は使役とも尊敬ともとれる。

二 主語は文脈上わかるが、敬語は「のたまふ」のみの人物。

三 謙譲語「申す」だけで誰が誰に言ったのか想像がつく。次の歌の作者は誰か。

四 何が「空言」だったのか。

五 「か+は+推量」は反語のことが多い。娘になり代わり誰かが詠むのはよくあることで、この歌の作者の立場から想定されるのは？